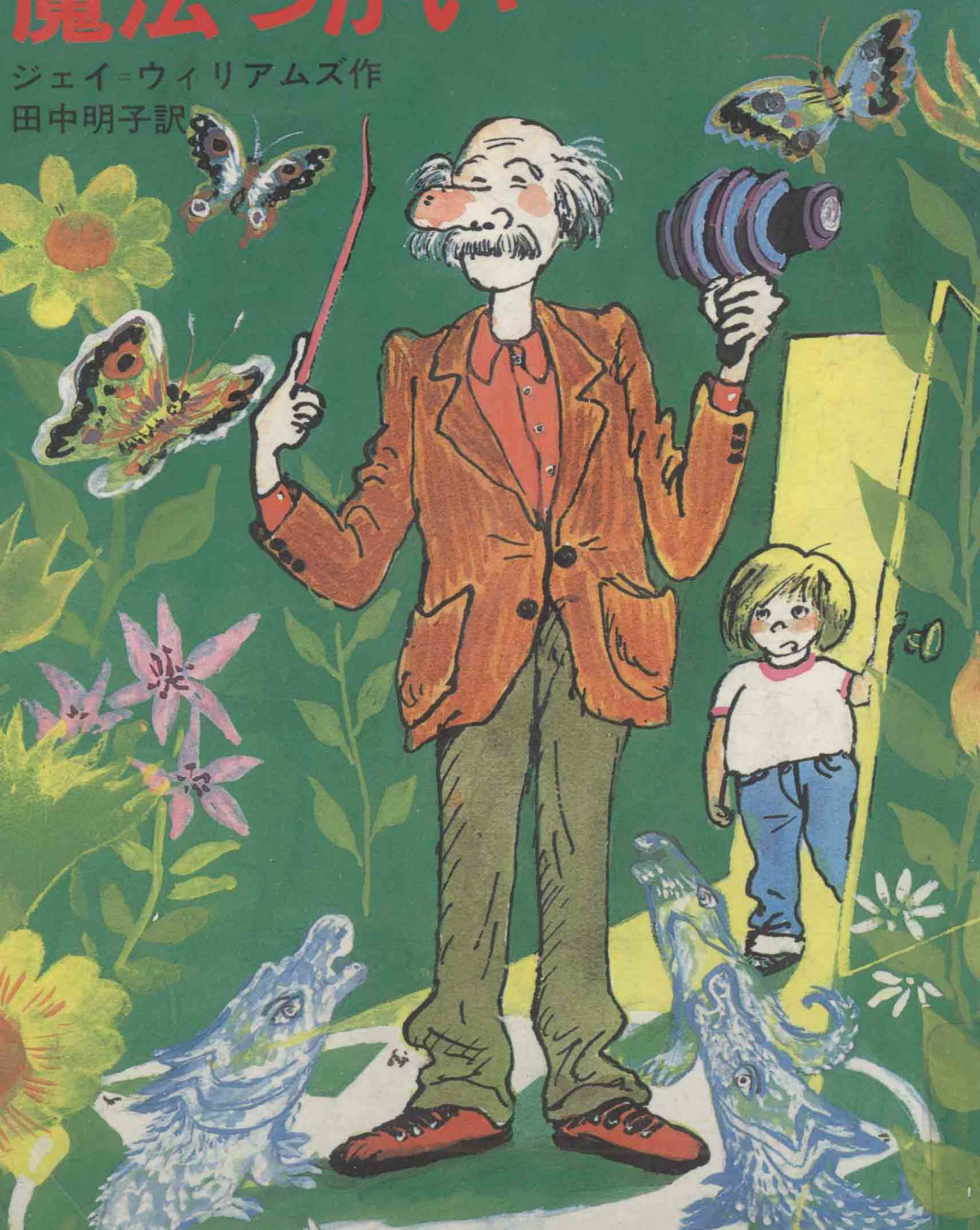


おじいちゃんは まほう 魔法つかい、

ジェイ=ウィリアムズ作

田中明子訳



933 Williams, Jay
(NDC)

おじいちゃんは魔法つかい

ジェイ＝ウィリアムズ著 田中明子訳

学習究研社

176p 図 23cm (新しい世界の童話シリーズ)

原題：THE MAGIC GRANDFATHER

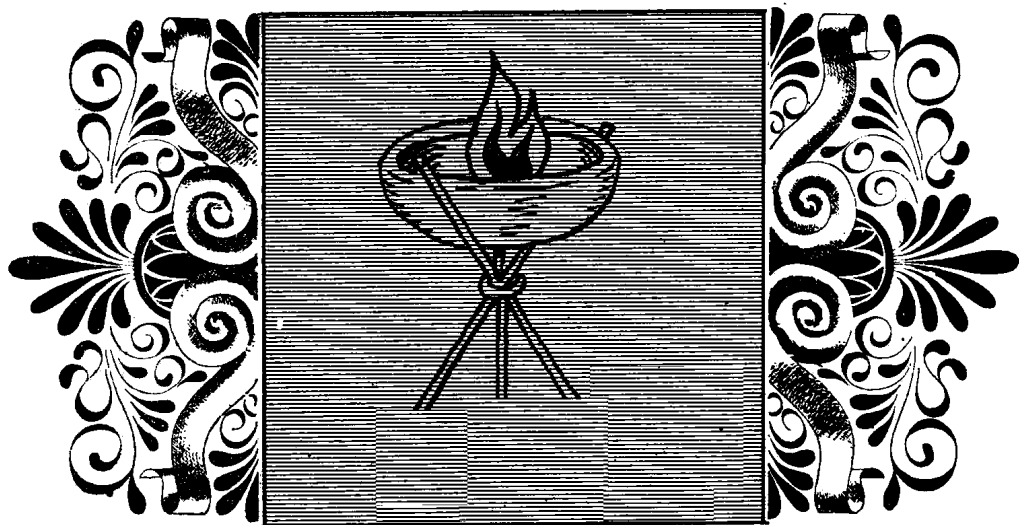
いちゃんは魔法つかい

ジェイ＝ウィリアムズ作

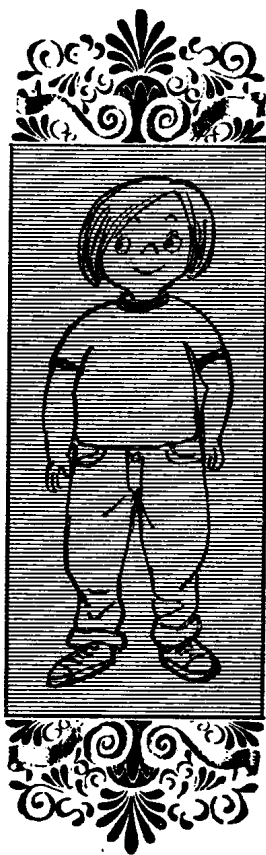
田中明子訳

むかい ながまさ画

THE MAGIC GRANDFATHER

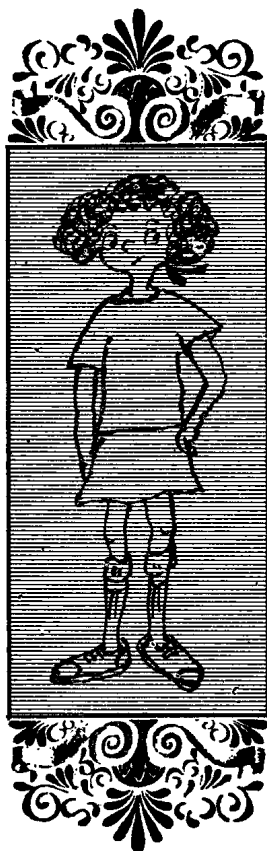


The Magic Grandfather



おじいちゃんは魔法つかい もくじ

- 1 大^{だい}すきなおじいちゃん……………5
- 2 午^ご後^ごは魔^ま術^{じゆつ}師^しといっしょ……………20
- 3 別^{べつ}世^せ界^{かい}への入^いり口^{ぐち}……………38
- 4 サム、相^{あい}ぼ^ううを見^みつける……………48
- 5 まじないの勉^{べん}強^{きやう}……………64



- | | | |
|----|---------------|-----|
| 11 | ふたりでチームを……… | 163 |
| 10 | ものうつしのまじない……… | 139 |
| 9 | おじいちゃん救出の日……… | 125 |
| 8 | 予行演習……… | 107 |
| 7 | 形かえのまじない……… | 96 |
| 6 | じごく耳のウエーデル……… | 81 |

THE MAGIC GRANDFATHER

by Jay Williams

Copyright © 1979 by Jay Williams

Japanese translation rights arranged through

Laurence Pollinger Ltd., London and

Tuttle-Mori Agency, Inc, Tokyo

●訳者のご紹介

慶応義塾大学英文科卒業。英米児童文学の翻訳にたずさわっておられます。主な訳書に『この湖にボート禁止』『黒旗山のなぞ』『ゆかいなななかま南の国へ』『砦』『シルマリルの物語』などがあります。

Ⅱ 大^{だい}すきなおじいちゃん

おとうさんとおかあさんのほかに、サムリムナーの大^{だい}すきなものは、テレビとおじいちゃん、どつちかをえらばなければならないときは、ほんとにこまつてしまいます。

いまだって、テレビで宇宙^{うちゅう}病院^{びょういん}船^{せん}のブレース^{せんせい}先生^{せんせい}が、二つ頭^{あたまたけ}の敵^{てき}といさましくたたかっているところを、あまりむちゆうでみていて、おとうさんに、とうとう肩^{かた}をゆすぶられてしまいました。

「おじいちゃんのところに行くんだろ？」

「なあに？」サムは、テレビから目^めをはなさないでいいました。

「何^{なん}度^どもいわせないでくれよ。もうすぐ七時半^{じはん}だ。すぐいかないと、もうおそいって、おかあさんにいわれるぞ。」

おかあさんは、おじいちゃんのことをなまけものだと思^{おも}っていて、口^{くち}にだしてもよくそ



ういいます。

「すぐいくよ。でも、どっちが勝つか見たいんだ。」

「ブレーズ先生せんせいにきまつてるさ。」

サムは、しぶしぶテレビをけしました。

「あした、おとうさんがいくかもしれないって、つたえてくれるかね。」と、おとうさんがいいました。

「いっとくよ。」そうこたええると、サムはジャンパーにからだをおしこみ、声こえをはりあげていいました。「おかあさん、いってきまーす。九時じごろかえるからね。」

おくのへやから、おかあさんの声こえが聞きこえ

ました。

「宿題はすんだの？」

サムはもう外にでていました。

うすらさむい十月はじめの、よくはれた晩です。明るく光る大きな星が一つ、波止場の空にかかり、風が少しふいていました。人通りの多い海岸通りを歩き、リムナー通りのかどまでくると、むかい側のかどに、四角い茶色の古い家があつて、「縫帆長、サムエル・リムナーの家 一七三〇年」という木のふだがつけられています。サムの名まえは、このサムエルからとつたのです。町じゅう親せきだらけで、その中の最長老が、ランダル・リムナー、なまけもので、のんびえで、かけトランプずきのごくつぶし、つまりおじいちゃんでした。

リムナー通りにはいると、海からの風が、ぐいぐい背中をおします。サムはポケットに手をつっこみ、前かがみになって、足をはやめました。

「気をつけてよ、とんま！」

女の子ふたりにぶつかるころだったのです。どちらも、歌手のように髪をちぢらせ、息がつまるくらいわらいころげていました。黒っぽい髪は、サムのことこのサラ・バーチです。

金髪のテレサが、いいました。

「ふとって、自分の足が見えないんじゃないの？」

サラは、またわらいだしました。

「ねえ、サム、あたしたちとデートしたことにして、アイスおごってよ。」テレサが、調子にのっていいました。

「口紅、はみでてるよ。」サムは、おだやかにいいました。

テレサがあわてて鏡をさがしはじめると、サラがいました。

「本気にしたらだめ。なによ、サムったら、自分のほうこそかっこわるいくせに。」

サムは、ただにやにやするだけです。まあ、ゆるしてやろう。こっちはサラの秘密をしってるんだ。

「おじいちゃんどこにいくからだめだよ。」

『ティピー』にいくの？」

『ティピー』は、クリームサンデーのおいしい店です。

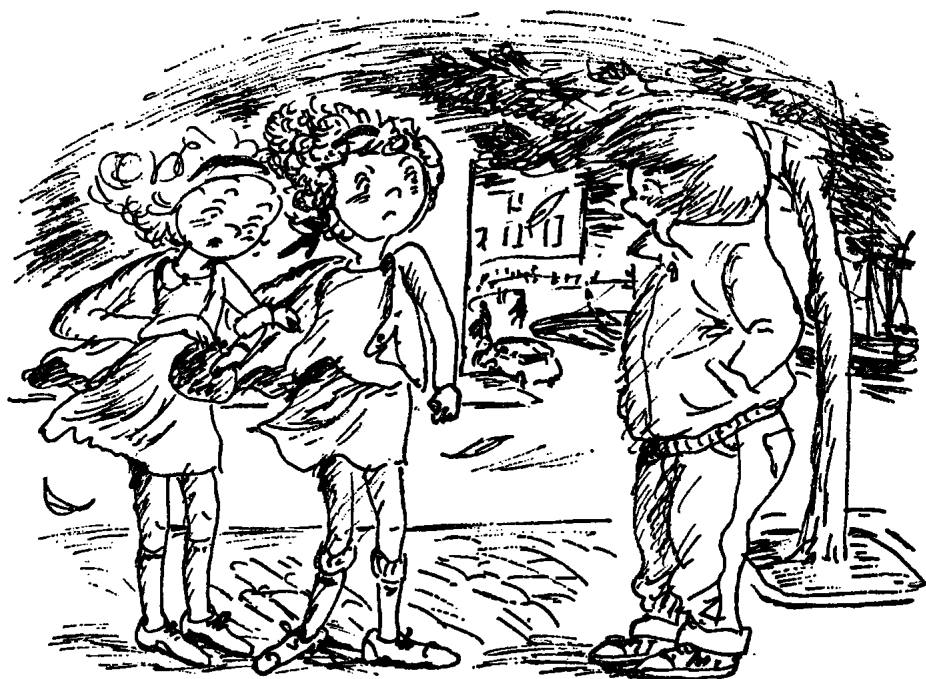
「よけいなおせわ。」テレサは、まだ口紅のことをおこっていました。「どっちみち、ガキとは歩かないもん。」

テレサは、サムより三か月年上です。

サムは、きげんよくいました。

「じゃあね。」

おじいちゃんのすんでいるのは、リムナ1通りでも、はずれのほうで、まずい家の多いところでした。おじいちゃんがか



ているのは、かどの家の地下室です。建物のうらの地下室の入り口から中へはいると、びっくりするようなまっ黄色のドアがあります。

ドアをあけると、またびっくり。ひろいワンルームは居間けん寢室。かたすみにはバスルーム。通りに面したところに台所。歩道の高さに、小さな窓がついています。居間には窓はありません。かべは、あたたかそうなオレンジ色にぬられています、床から天井まで、たながつくりつけてあり、本や道具や機械みたいなものが、いっぱいのっけていて、ほとんど見えません。おじいちゃんは、がらくたの収集家で、おまけに、先祖からうけついだがらくたもあります。ガラスの文ちんとか、ぞうげのほりものとか、フクロウのはく製とか、時計のついた陶器の家とかです。たなの一部は、戸だなになっていて、びんやつぽや、みょうな形の道具などがはいっていました。家具はベッド兼用の長いすが一つ、つめものがはみでてきたひじかけいすがいくつか、そしてテーブルが二つです。それから、このにおい。ほこりとカビとタバコとビールとフライのまじった、みょうになつかしいにおいです。でも、いちばんサムをわくわくさせるのは、おじいちゃんのじょうだんと手品

でした。

しかし、きまりが一つありました。はいるまえにノックをすることです。いまでも、サムはノックをしました。

「おはいり！」そして、おじいちゃんはいいました。「見せるものがあるよ。」

おじいちゃんは背が高く、どうどうとしていて、とてもただのなまけものには見えません。ツイードの上着はくたびれ、灰色のスボンはすりきれていますが、おじいちゃんは、とても清潔です。りっぱな鼻は、静脈が青くすけて見え、するどい青い目の下には、たるみができています。たしかにすごい年よりでしょう。うすくなった髪は灰色で、字を読むときは、ふとい黒ぶちの老眼鏡をかけなければならないのです。それでも動作はきびきびと、まるで若い人みたいです。

長いすの前のテーブルに、なにかのつていました。

「ギロチンって、しっているかね？」

「頭をちょんぎるものでしょ？」

「そのとおり。フランス革命（十八世紀末フランスで、自由・平等をかかげておきた革命）でつかわれたのだよ。これが模型だ。」

おじいちゃんは口からタバコをとって、模型のくぼみにおきました。そしてつまみをおすと、するどい刃がおりてきて、タバコは、すばっとまつぶたつになりました。

「こんどは、おじいちゃんの指でやるぞ。」

「だめだよー！」サムが泣き声をだしても、もうおそく、刃のおちるおそろしい音がしました。そしておじいちゃんは、きず一つない指をふって、クックッとわらいました。

「どうしたの？ どうしたの？」

「まあ、まあ、ジャンパーをぬぎなさい。コーヒーのむかい？」

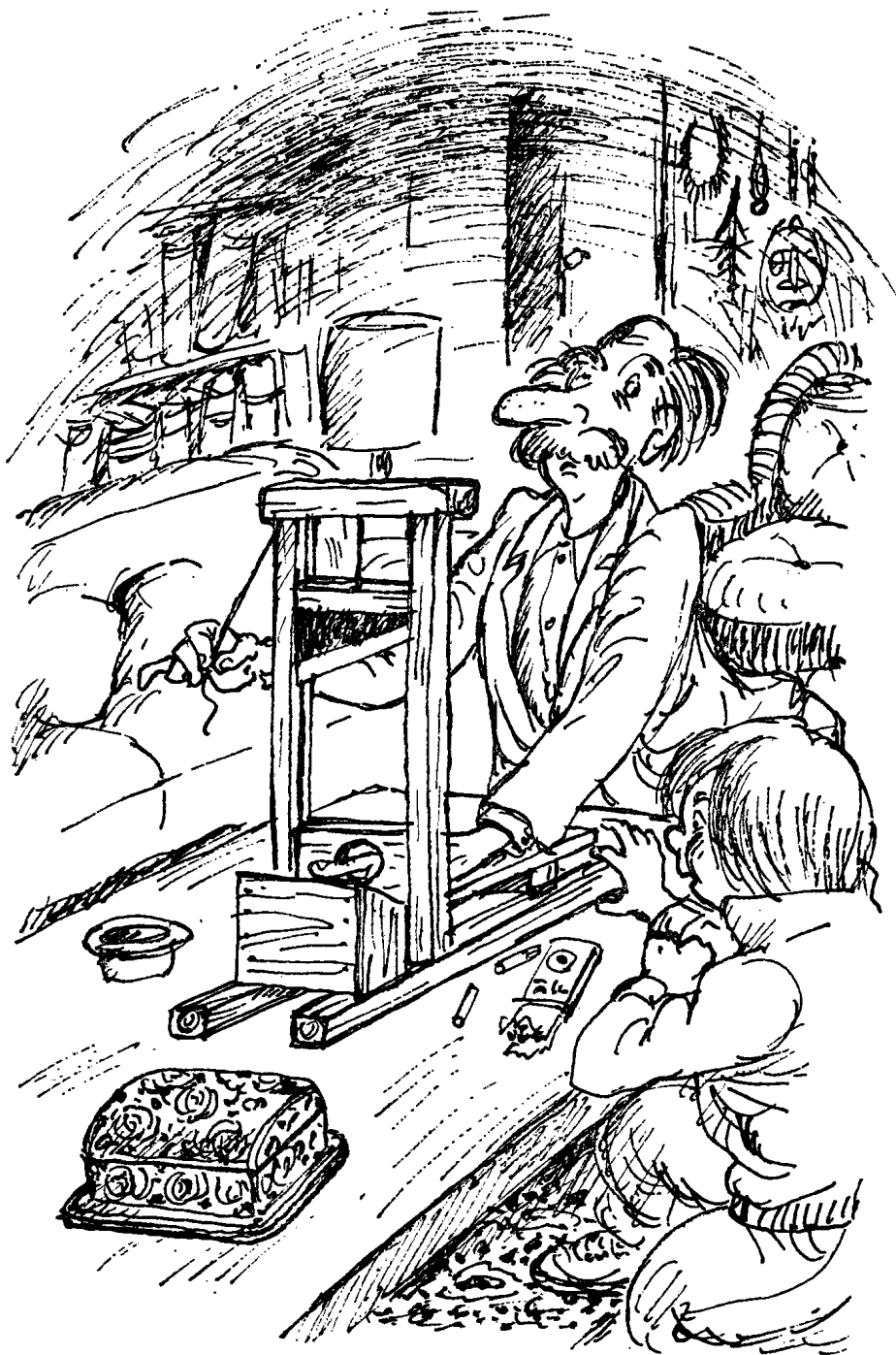
サムは、うちではコーヒーはめったにのましてもらえません。

「ありがとう。ちょうだい。」

おじいちゃんは、コーヒーをたらしたミルクをもってきてくれました。

「べつを見せてやろう。」

おじいちゃんは、バラの花もようの小箱をとり、ふたをあけました。中はチョコレート



がいっぱいつまっています。

「ミントがすきなんだろ。おとり。」

サムが手をのばすと、おじいちゃんはどういちどふたをして、かるくトンとたたき、またふたをとりました。中はからっぽです。

「わあ、すごいや。底にしかけがあるの？」

「そうだよ。ほら、チョコレートはプラスチックでできていて、つながっている。ふたをたたくと、これがおちて、その上にべつの底がおちる。やってごらん。」

何度かやって、サムがこつをのみこむと、おじいちゃんは、ギロチンのしかけもおしえてくれました。そのあと、ふたりはなかよくすわって、サムはコーヒーをのみました。

「なにかおもしろいこともあるかね？」

「宇宙病院船のあたらしい番組がはじまったよ。すぐおもしろいから。そうそう、暗号表もってきた。おじいちゃんもつかってみたら。」

ふたりは頭をよせあって、テレビ局からおくってきたパンフレットを見ました。

「うつしといて、ぼくと連絡するとき、はがきに暗号で書けば？　おかあさんにもわかんないし。」

おじいちゃんは、まじめな顔でうなずきました。

「おかあさんはいい人だ。わるく思っちゃいけない。」

「でも、どうしてなの？　おじいちゃんがはたらいてないから？　はたらくには、年とるすぎてるよね？」

「そんなことはない。」おじいちゃんは、きっぱりといました。「わたしには、ちゃんと仕事がある。おかあさんはね、わたしに、ほかの人とおなじにしてほしいんだよ。ちゃんとした家にすんで、お客さんにもいばって紹介できるような、きちんとした人で、友だちのガーフィンクルとトランプ遊びなんかしないで、日曜には、ネクタイしめて、教会にくような人であってほしいんだよ。」

「おじいちゃん、ほんとになまけもの？」

「そう見えるだろうね。おばあちゃんが生きてればなあ。」おじいちゃんは、頭をふりま